



ミュンヘン便り ～ 空を飛ぶ ～

この原稿を書いている4月中旬、ミュンヘンではあちこちから春が吹き出ています。木々からは日に日に若葉が出てきます。ミュンヘンを流れるイザール川では、住人の青首鴨に加え、様々な渡り鳥を見ることができます。白鳥、グース、日本の警察車両のような白と黒の模様を持つ鴨、など。5月になると、オシドリもやってきます。オシドリの滞在期間は短く、あまり数も多くなく、しかもイザール川のどこでも見れるのではなく、特定の場所に現れるようです。彼ら水鳥の水の上での離発着を観察していると、「うーん、飛行機そっくり」といつも感心します。水上から飛び立つ時や着水時に彼らの飛行ルートと水面とがなす角度、彼らのボディと水面との角度、まさに飛行機の離発着のごとです。もっとも飛行機のほうが彼らからヒントを得ているのかもしれない。

ミュンヘンから車で2時間ほど南西に行ったら、ボーデン湖があります。ドイツ、オーストリア、フランス、スイスの4カ

国が、ボーデン湖で「こんにちは」をしています。ボーデン湖以西はコウノトリの一種、シュバシコウの生息地。翼を広げると2mを超えるこの鳥がゆったりと羽ばたかずに滑空している姿は、とても優美でみとれてしまいます。コウノトリに触発されたのか、ツェッペリンで有名な飛行船発祥の地は、そのボーデン湖畔の街Friedrichshafenにあります。この街にはツェッペリン博物館があり、ツェッペリンにまつわる諸々が展示されています。そして、復元された飛行船の一部も。

飛行船の中のラウンジはあたかもホテルのラウンジの如きゆとり空間です(写真)。飛行物体の中とは到底思えない広さ。それから約90年後、空を飛んで移動することが普通のことになった今でも、もっと狭い空間の中で日本ードイツを往復する身にとっては、90年前にそれほどの広い空間を満喫しながら空を飛ぶのに要する費用が気になります。

博物館では、客室部分だけでなく、飛行船





の船体部分（空に浮くための構造部分）も見ることができます。船体を支える枠組みの構造、空気よりも軽いガスを詰めるための気嚢などを、実物大の船体の内側から見る事ができるのです（写真）。間近で見ると実に巨大な構造物です。

ツェッペリンは、飛行船会社 Luftschiffahrts-Aktiengesellschaft（直訳は、「空気船航行株式会社」）を設立して、ドイツと世界のあちこちとを結ぶ商業飛行路線を作りました。よく知られているニューヨークでの爆発事故までは、ビジネスはうまく行っていたようです。飛行船会社は株式会社でした。飛行船会社の一時的発行株価は、一株1000マルクであったことが分かります（写真）。会社はたくさんの飛行船を作りましたが、その中でも彼の名前を冠した飛行船 Graf Zeppelin号 LZ127は、1929年に来日しています。その際に彼が購入した赤い可愛らしい着物と下駄とが展示されていて、嬉しくなりました（写真）。

飛行船発祥の地がボーデン湖なのは、コウ



ノトリに触発されたからではありません。いや、ひょっとするとそれも一因だったかもしれませんが、実はもっと現実的な理由があります。巨大な飛行船を建造するために、障害物がまったくない広い空間が必要だったので。博物館では、巨大な飛行船が湖上で建造されている様子を撮影した写真も展示されています。

ドイツの文字通り最南端に位置するボーデン湖は、ミュンヘンと同じバイエルン州にありながら、ミュンヘンよりもずっと暖かく、天気が良ければ対岸にスイス・アルプスの山々を望むことができます。温暖な気候のため、りんご、ぶどう、ネクタリンなど様々な果物の天国でもあります。ミュンヘンに来られたら、ぜひ一度ボーデン湖にも足を伸ばしてみてくださいね。

筆者紹介

稲積 朋子（いなづみ ともこ）

1994年弁理士試験合格。2012年ヨーロッパ弁理士試験合格。現在、GIP Europe Patentanwaltskanzlei所属。1997年、新樹グローバル・アイビー特許業務法人入所し、主に国内外の出願及び権利化業務を担当。2007年11月より、ミュンヘンの現地提携事務所に駐在。2009年1月、GIP Europe（GIPグループミュンヘンオフィス）設立。日本企業からのヨーロッパ出願・中間処理・異議申立・侵害品ウォッチングや、ヨーロッパ企業からの日本出願・中間処理業務を行う。趣味は、山登り、ぼーっとすること、寝ること、健康づくりに励むこと。